

雲中に至らば開墾す
要春總人數移住此準
とす (以下次號)

觀布選郡區長へ委任
關スル願伺屆書等
查スル事

府知事芳川顯正

田日本橋京橋區役所
五條中「其區役所へ
へシ」ト改メ第六條

人ヨリ差出ス所ノ驛
候手續ヲ改メ單ニ驛
條積金人ハ毎月無遅
ヲ受ヘキ旨區内へ告

總監 樺山資紀
府知事芳川顯正

田日本橋京橋區役所
續改正候ニ付テハ是
項ノ預リ証以下九字
以下ノ六字ハ自然消
告示スヘシ此旨相達
區役所領収証ハ都

總監 樺山資紀
府知事芳川顯正

區役所
調管ニ限ルヘシ尤モ
修築ノ都度改造候義

府知事芳川顯正

小笠原島
別紙之通相定候條此

府知事芳川顯正

由リ宅地ハ一戸ニ
一回ニ付一丁五反歩
墾落成ノ上幾回モ墾
養ニ關スル部分ヲ除
地ハ凡二反歩一區
ハ一切伐採ヲ禁ス
十一月ヲ以テ落成期
ハ直ニ之ヲ取消スヘ
年間荒蕪ニ附セシモ
他ノ營業ノ爲メ土地
并借地ハ私ニ地形ヲ

正五位 林 厚徳
從五位 池田 徳潤

時事新報

文明ノ交通法へ必ズモ高尙ナラズ

交通即チ文明開化ナリトハ我輩ノ持論ニシテ交通トハ人
ノ智見ヲ交換シ有形無形ノモノヲ相互ニ通スルコトナリ先
進ノ學者ガ後進ノ輩ヲ導キ、家ノ父兄ガ其子弟ヲ教訓シ
或ハ學術ノ會議討論ノ如キ或ハ集會談話ノ如キ皆交通ノ
法ニアラザルハナシ其人生ヲ益スルノ大ナルハ世人モ普
ク許ス所ナリト雖モ元來交通ナルモノハ獨リ高尙ナル學
問社會ノミヨ止マルノ限ニ非ズ一事一物至極通常ノモノ
タリトテ知テ人ヲ益セザルモノナシ道ヲ行クニ捷徑ヲ
知り、物ヲ見テ其名ヲ知り、人ニ逢フテ其履歷ヲ知り、他
郷ニ遊テ其地理ヲ知ルガ如キ何レモ人生必要ノコトニシテ
決シテ之ヲ等閑ニ附ス可ラズ況ヤ商工工藝ノ事ニ關シテ
ハ物品生産ノ地ヲ知り、其製造ノ法ヲ知り、其器械ヲ知り
、其人物ヲ知り、其製法ノ精粗、其時價ノ昂低、其運輸ノ方法
、其買入ノ手續等之ヲ詳明スルニ非サレバ忽チ人ノ營業
上ニ差支テ生ス可シ管ニ營業者ノミ然ルコト非ズ身躬ラ商
工ニ非ズシテ唯商工ノ物品ヲ消費スル人ニテモ以上枚舉
スル件々ノ大略ヲ知ルコト非サレバ以テ文明ノ世界ニ居ル
可ラズ今ノ世ノ中ハ昔ニ異ナルモノト知ル可キナリ
然リト雖モ古今世ノ形勢ハ異ナルモ人類ノ形ハ異ナルニ
非サレバ器械ノ助ヲ依リテ交通ノ手段ヲ便ニセザル可ラ
ズ其器械トハ即チ蒸氣電氣郵便印刷等ニシテ國ニ此器械
ヲ用ルノ盛否ヲ見テ其國ノ文不文ヲトス可シトハ必ズ
モ我輩ノ辨ヲ要セズ然ルコト我日本國ニ於テハ交通ノ器械
ヲ用ルル尙未タ廣カラズシテ蒸氣船車ノ如キ甚ダ不十分
ナリ畢竟其業ヲ興ス者微細ナルガ故ニ之ヲ用ヤントスル
モ得ヘカラズト云フト雖モ我輩ノ所見ニ於テハ獨リ其弊
ヲ興業者ノミニ歸ス可ラザルモノ、如シ試ニ今日我電信
郵便ノ組織ヲ見ヨ或ハ其價ノ廉ナラザルニ就テ多少ノ苦
情ハアル可シト雖モ其便利ノ點ニ至テハ之ヲ二十年
飛脚屋ニ比シテ如何、實ニ數ヲ以テ云フ可ラザル程ノ相
違ナラズヤ我國人ハ現ニ此至便ノ器械ヲ掌握シナガ今
日ノ實際ニ於テハ其便利ノ割合ニ之ヲ使用スル者ハ少ナ
シ、又印刷ノ利ヲ利用スルハ殊ニ新聞紙ヲ以テ最トシ千
里外ノ情況ヲ掌中ニ一見シ、今夕ノ事ヲ明朝ニ知り、智見
ノ交換瞬間ニ成ル者ト云フ可シ然ルニ過般時事新報ニモ
論タル如ク(四月十日時事新報社説)我日本國中ニ新聞
紙發賣ノ紙數甚ダ少ナシ、人文未ダ發達セズシテ學問上
ノ事ヲ記スモノニ眼ヲ注シ者多カラザルハ我輩ノ素ヨリ
ニ關スルコトニテ未ダ新聞紙ヲ利用スルニ至ラザルガ如
ク其實際ヲ知ラントナラハ諸新聞紙ノ面ニ廣告ノ少ナキ
ヲ見ル可シ冠婚葬祭吉凶ノ事、轉居旅行出處等ノ事ニ就

テ報告ノ種アルハ無論、彼ノ醫師ノ開業、商家ノ開店又ハ
臨時ノ賣賣等最モ世ニ知ラレ、ヲ要シテ其コレヲ知ラレ
、ト石トハ正シク電局者ノ利益ニ影響スルコト大ナル事柄
ニテモ尙默シテ廣告セザル者アリ誠ニ怪シム可キニ非ズ
ヤ假令今同種ノ資本ヲ以テ同様ノ商賣ヲ始メ同區同町東
西相隣ニテ同様ノ店ニ開業スル者アリトモ然ルニ其東
店ハ開業ノ次第、商賣品ノ性質、賣入ノ方法、或ハ其價ノ
大概ヲモ廣告セテ爾後隨時コレヲ忘ラザルニ西店ハ之ニ
反シテ默々スルコト今日普通ノ商家ノ如クシテラヤ兩店ノ
商況果シテ如ナル可キヤ其利不利ヲ斷スルコト甚ダ易カル
可キ元來商家ニハ開店ノ地ヲ擇ブコト甚ダ緊要ナリ例ハ
東京ニテ日本橋ノ通町ハ最モ商賣ニ適シテ其裏町ハ然ラ
ズ、裏町ノ地價ハ廉ニシテ通町ノ地價ハ甚ダ高價ナレハ
商人ガ之ニ甘ゾズルハ何ソヤ通町ハ往來繁多ニシテ其店
ノ所在ヲ人ニ知ラシムルニ便利ナル其上ニ店頭ノ品物モ
ヨク人ノ目ニ觸ルレバナリ、即チ江湖ノ人ト商店ト直接
ノ交通便利ナレバナリ、今直接ノ交通ハ商賣ニ便利ナル
ヲ知テ地價ノ貴キチモ憚ラザル者ガ新聞紙ノ廣告ヲ以テ
間接ノ交通ヲ求ルヲ知ラズ畢竟數百年來塾居ノ風ニ慣レ
タル商人輩ガ俄ニ文明開化ノ繁劇ニ逢フテ之ニ處スルノ
法ヲ求ルニ追アラザルモノト云フ可シ斯ル普通ノ事情ナ
レバ方今我國ニテ交通ノ不便利ヲ慨嘆シ鎮道布設ノ事共
議論シテ只管興業家ノ無力ナルヲ咎ル者ナキニ非ザレハ
一方ヨリ論スレバ假令ヒ其事業ヲ興サントスルモ事業ノ
成跡ヲ利用セントスル者少ナク自カラ其議論ニ賛成ヲ得
ズシテ急ニ事業モ舉ラザルコトナラン故ニ苟モ交通ノ利ヲ
知テ之ヲ興サント欲スル者ハ常ニ手近ク文明開化ノ主義
ヲ説キ交通トハ獨リ學問上ノ談ニ非ズ電信郵便ノ通信新
聞紙ノ廣告モ悉皆開明ノ事ニシテ民利國益ノ源ナルノ旨
ヲ普ク通俗ニ了解セシメヨコ希冀ニ燃ヘザルナリ
本文交通ノ事ヲ論シタル所ニ又云フ可キモノアリ人戸稠
密往來繁多ノ市都ニ在テ商賣工業ノ人ガ引札ヲ製シ市中
ノ處々ニ貼シテ諸人ノ注意ヲ惹クハ文明諸國普通ノ慣行
ニシテ例ハ英京龍動市中ノ如キハ最モ盛ニ行ヘレ毎片
ノ壁ニモ主人ノ承諾ヲ得レバ爭フテ之ヲ貼シ然ラザレハ
橋ノ欄干、停車場ノ柱、苟モ人目ノ多キ處ニハ種々種々
ノ紙片ヲ張付ケテ寸隙ヲ遺サズ甚シキハ奇ヲ以テ人ヲ驚
カスノ趣意カ又ハ場所ナキニ苦シミタルモノカ非常ナル
大紙ニ大書シ又圖書ヲ寫シテ之ヲ往來ノ石垣ニ貼シタル
モノモ甚ダ多シ一見スレバ市中ノ整齊壯麗ノ美觀ヲ損ス
ルガ如クナレハ一步ヲ進メテ考レバ礎石ニ龍動市中ノ景
ナルヲトスルニ足ル可キ我國ニテハ官ノ成規ヲ以テ張札
ハ一切禁制ナルガ故ニ二三都其外ニテ毎戸ノ壁ハ無情無
石遊モ目ニ觸ル、所ハ至極清淨ナルニ似レレモ若シモ

人輩ノ引札ヲ以テ文明交通ノ一具ト爲シ其各處ニ貼シテ繁雜ナルハ恰モ此輩ガ聲ヲ殺シテ自家ノ寶品ヲ街フモノト視做スハ萬口語々市中ヲ動カスモノニ異ナラズシテ大日本國都會ノ盛ナルヲ表スルコト足ル可シ固ヨリ此等ヲ許シテシテ何カ弊害ノ生ズルコトモアル可キ歟我輩ノ嚮向モ思ヒ當ラザルコトナレドモ若シモ之ヲアラハ宜シク制限ヲ定メテ然ル可キコトナラン

報

○皇太后宮御座所 皇太后宮は皇居御造營の後も矢張り青山御所へ御住居遊ばるる旨御内決ありしに付て右御造營の皇居内へ、皇太后宮御座所の積りお更へ皇太后宮の御座所をも設け置れ御座内の御用供へらるる御座所御造營總裁へ御沙汰在せられ

○西川親王 同親王は去月十二日英國を發して歸國の途に就くれし由に豫て本紙上お掲げしが本本より通り過るも来月上旬の御歸朝あるべしと
○宴會 香川宮前少輔が催主となり明六日芝離宮を拜借きて日布哇國を歸朝にありする杉宮内大輔と初め宮内勅奏任官の方々を招いて宴會を開くと云
○沖繩縣令任期 去る明治十二年四月四日沖繩縣を置かれ同月五日鍋島直彬君が初めて縣令に任せられしが夫より十四年四月九日上杉茂憲君之れお代り猶また本年に到り四月廿四日同君お元老院議官に轉任せられ同日岩村通俊君代りて兼任せられしが是迄は同縣令は曾滿二ヶ年にして轉任あるを見れば右任は三ヶ年を以て交換の定規となまふるもの、如くお思ふと或人の語りき

○離宮修繕費 西京愛宕郡修學院村ある上下は離宮と追々破損せしを以て此程右修繕費を其筋へ御沙汰ありたるよし
○官署改定 皇威官々等表改正の旨昨日太政大臣より各省廳へ轉りありする由尙ほ委しきことの大體事竣て報道すへし
○時局 内務、大藏、農商務の三省に來る十日、一時は午前二時退出と定りたり

○日京城壁化信書 日く朴泳學氏が先般日本より歸國後には頗り開化説を主張し漢城列國を爲るに至りて親憲政府の改革は從事し日命を下して城內大道

の兩側に在る小屋掛けの露店を取拂はしめたるがた先大よ小民の迷惑を來にし誇耀をたるとり兼て朴氏を蛇蝎視し居たる當時執權の支那黨およき口實を與へ忽ち免職の沙汰及ぶりと之がた先過日議決する新聞紙發行の事も當分見合せとあるよし云々
○軍人龜鑑の碑 前號お記載せし西南の役に殊功を建て遺お戦没せし故谷村計介氏の石碑に去る二日を以て建築竣功せしげ靈座の異様奇態の礎石を以て臺を棹石の御影めて最も壯觀の者あり笑頷軍人龜鑑の四大文字の有栖川大將宮の染筆を係り撰文の當時砲彈雨に中を籠城せし谷中將にて書へ成瀬温氏の筆なり明六日の靖國神社の大祭お際しぬれば午後二時に谷中將、樺山少將、乃木、川上、奥、兒玉に四大佐、中村會計一等副監督、藤田大尉、小川會計軍吏、中岡大尉、川口會計軍吏、糸賀小尉に建碑委員の更あり其他參集して竣功の典を舉げ傍ら祭祀を執行すると云是より先悉くも 聖上おは右建碑の事を聞食し給ひて若干の金圓を下賜され今又此祭祀は皇恩無極榮譽無限且其功績お載せて碑文中お在れお赫々たる功勳不朽お傳はり眞軍人の龜鑑とあるべく氏が靈魂をして知らし先は化生お勝るの榮譽を喜ぶ領くるへし

陸軍歩兵伍長谷村計介
左大臣兼鎮定官陸軍大將
二品大勳位煇仁親王篆額
嗚呼、一卒一下士耳、而忠勇義烈、巍然炳然、是以爲軍人龜鑑、如谷村計介者、則勝悼歎、計介、日向諸縣郡、倉岡之士族也、父曰坂元利右衛門、計介其第二子、出嗣谷村中兵衛家、明治五年、熊本鎮臺、徵爲歩卒、七年二月、佐賀人作乱、靈發歩兵一大隊、分爲二、水陸并進、計介從大隊長心得大尉和田勇馬、由海路、入佐賀城、賊遽然來攻、鎗砲交發、城中無糧儲、彈藥缺乏、勢不可支、分三梯陣、以合陸路兵、計介屬中陣、開門突出、賊四面夾擊、我兵殊死戰、賊軍披靡、遂得破一方、然隊伍混亂、又分爲三、計介屬大尉奧保登、且戰且走、至繩取村、有小川、賊伏兵前岸、我腹背受敵、少尉三木一、率小部隊、尊堤放銃、擊賊右翼、計介挺身奮鬪、遂破之、涉川抵江見村、見田夫疾走、衆聞、彼必報我動靜於賊也、計介進曰、我不諳地裡、屢迷賊路、所以致賊若輩、願此距住吉津不遠、我請離隊、到河津續船、沿途有賊、必發銃射我、諸君聞銃聲、則更取他路、我一死爲諸君嚮導、衆感歎計介之、計介乃單身前行、衆皆傾耳而尾之、及河津、計介既歸、待、乃急渡、賊兵追至、無船可濟、我兵遂得會陸兵於府中驛、是役也、徵計介、則一都兵、盡爲河上鬼、亦未可知、噫危哉、己而大坂軍來援、諸道並進攻佐賀、計介每戰甚力、人稱其膽勇、六月、任陸軍伍長、八月、屬第一大隊、從從之役、九年、神風黨之襲鶴守也、參謀大尉大迫尙敏、以事任小倉、聞變即還、聯隊長心得少佐乃木希典、使計介隨行、蓋知其可倚也、計介已至熊本、將復赴小倉、靈發形勢、

會山口秋月乱人並起、諸縣釋、以便道探偵柳川、若有異狀、速以親動靜、以其無異狀、遂到大軍圍熊本城、內外阻絕、聲聞報守城方零於征討軍營、難其在城中、聯隊長心得少佐川上、密諭再三、計介沈思久之、曰、事保必成、但復命日難期耳、與授教令、計介俯聽、遂取煙煤壘如自然、因着鴉衣、咲曰、可以將赴南關、爲賊所縛、百方解謝、爪斷繩而遁、潛行吉次山中、再狀、股栗垂泣、賊憫之、解縛爲第一旅團、時二月二十八日也、飲食共絕、比隨官軍、顏色盡變、信、縛致之本營、團長少將野津不能言、蓋脫苦楚、終使命、喜、遂命令、說戰狀、悲壯慷慨、聽者之、令在營休止、三月四日、官軍戰隊、慰諭不許、堅請不已、乃令不利、計介怒氣勃々、不能自抑叱叱、突入賊壘、中銃彈而斃、年名郡不葉町宇蘇浦、計介至舉靈發發憤、請書習字、非復吳下阿蒙、兵卒、勇奮挺身、脫一部六十餘一下士、堅忍不撓、克達使命、而々、使人感動、謂之軍人龜鑑、非四次、阿當受勳章、况其殊功如常有特異之獎賞、而今如此、可相謀、建碑於靖國神社境內、以卒皆欣然拒贊助之事、勳、勳、計介之功、於是乎炳然著聞、其爲榮莫以加焉、於慶盛矣哉、承之熊本鎮臺者、兩次、議計介尤援筆記其顛末如此、明治十六年、位勳二等子城撰

○武官轉動 東京鎮臺軍法會議島鎮臺軍法會議所へ出張を命せ歩兵大尉お少佐お昇等名古屋隊お玉置騎兵大尉お同少佐お昇長小何れも拜命あり
○軍法會議所 東京軍法會議所おとたる總數の重懲役一人重懲一人重懲罰二十八輕懲罰二十七不論罪七八無罪二人逃亡一人死ありしと云ふ
○憲兵屯所 九段坂上元龜登屯兵第一方面にて修繕中ありしが一昨日憲兵本部へ引渡され愈
○對抗運動繪圖面 過日埼玉縣へれたる近衛諸隊對抗運動の繪圖近衛都小松宮方 專上へ奏上